
呼吸

ゆずのもと

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

呼吸

【コード】

N3953B

【作者名】

ゆずのもと

【あらすじ】

「君が笑っていてくれたら、それでいい。」心に傷を負った彼女を見守る、心に傷を負った主人公。そして彼を見守る親友。あたにかい恋愛物語。

第一話 風と君

春のにおいを乗せた風が部屋に舞い込んだ。その風に戯れる様に、無数の小さなしゃぼん玉。

朝食の片付けをしていた俺は顔を上げ、リビングの開け放たれた窓に目を向けた。

「おい、とーか。しゃぼん玉が中に入ってくるよ。」

窓辺に器用に腰掛けてぼうつとストローをくわえていた彼女が、俺の声に反応して振り向いた。

とろんとした、いつもの表情。しゃぼん玉の様なふわふわした笑顔で屈託無く笑った。

「しゃぼん玉大好きー。ゆうくんはもつと好きー。」

ゆつたりとした口調でそんな事を言い、彼女はしゃぼん玉作成を再開した。風向きが変わり、しゃぼん玉は外に向かって飛んでいく。桃華はしゃぼん玉が好きで、毎日こうしてしゃぼん玉を飛ばしている。誰にも何にも縛られずに。

縛られ続けた過去から目を背ける様に。

「じゃあ桃華。行ってくるよ。」

ストローを吹き続ける桃華に声をかける。桃華はぱつと振り返り、玄関へ向かう俺を追いかけてきた。

「今日は早い？」

「七時くらいには帰れるよ。」

俺が答えると、桃華はぎゅっと抱き付いてきた。小柄で細い桃華はとても軽い。左腕を背中に回し、胸の高さしかない頭を撫でてやると、くすぐったそうになっこり笑った。

「分かったー。早く帰って来てねー。」

「分かった。」

体を離し俺を見上げた桃華の額にキスをする。もう一度頭を撫でてやり、ドアを開ける。

呼吸

「行ってらっしゃい。」
見送る桃華の声を背に俺は家を出た。

第二話 彼女

「なあ、音咲^{おんざき}。近々合コンあんだけど、行かねえ？」

大学の食堂で昼ご飯を口に押し込んでいると川畑が向かいに腰掛けて話しかけてきた。その隣には、縮れ毛の金本。二人揃ってニヤニヤと嫌らしい笑い顔。俺は正直、この笑みが苦手だったりする。

俺は眉を顰めた。

「何語？」

「うわ、冷たいなあ。お前居たら盛り上げるんだよ、オンナノコがねー、音咲君。行こうよー音咲君。」

「知らない。行かないよ、俺は。」

「ええ、なんで！」

「……………しつこいなあ。勘弁してよ。」

「優詞^{ゆうじ}は行かないよ。」

しつこい二人にうんざりしていた俺に助け船を出す様な台詞が背後から聞こえた。その声の主は当たり前前の様に俺の隣の椅子を引いて腰掛ける。

「あんまり優詞を困らせないの、二人共。」

弟をたしなめる様な口調には、同級生だという事を忘れてしまいそうな響きがあった。文字通り、川畑と金本は膨れながらも口をつぐむ。

このやたら落ち着いているのは、滝柳真冬^{たきやなぎまふゆ}。かれこれ小学生時代からの付き合いで、気心知れたダチだ。

兄貴分で頼り甲斐のある真冬は何かと俺に絡んでくる川畑と金本のストッパーになっていて、正直本当に助かっている。

口を尖らせて縮れ毛の金本が愚痴る様にぶつぶつ文句を言う。

「滝柳はいいよな。可愛い彼女居るって言うし。アツアツっぽいし。」

……………ん？音咲は彼女……………あ！」

何か思い出した様に大袈裟な声を出し金本は俺を指差した。

呼吸

「そう言えば、音咲の部屋の窓からオンナノコが顔出してしゃぼん玉してたの見たぜ！」

「あ、俺も！ロリータっぽい子だよな！『ゆうくん』て呼んでたよな、音咲のこと……！」

川畑もそれに便乗する。

「音咲、お前もしかしてロリコン………？」

「やっぱりあれ、お前の彼女………？」

「………俺、先に行くよ」

俺は二人の言葉を無視して立ち上がる。

「あ、逃げるのか！音咲！」

「こら、ずるいぞこの……！」

「はいはい。それくらいにしなよ。程々にしなきゃ滅多に無い優詞のマジギレ顔を見ることになるよ。」

まだ食いついてくる二人をあしらい、真冬も立ち上がる。真冬の脅しが効いたのか、二人はそれ以上は何も言ってこなかった。もしかしたら、真冬の台詞に凍り付いたのかもしれない。

「優詞。」

隣に並んだ真冬が俺を呼んだ。俺は歩き続けながら真冬に顔を向けた。

真冬は意味有りげな笑みを浮かべる。

「顔が引きつってる。」

「………そう？」

顔に手を当てる。

真冬は静かに頷いた。

「優詞、いつもああいう感じの話になると顔が引きつる。」

「駄目なんだよね、ああいう話。桃華のことを隠したいわけじゃないんだけど。あの二人にはどうも言う気になれなくて。」

「別にいいんじゃない。あいつらはやたら騒ぎたがるから。」

「さっきフオーありがとう。」

「どういたしまして。優詞はあの二人を躲すのがあまり上手じゃな

いから。」

「これでも上手くなったと思ったんだけどなあ。」

「甘い甘い。あいつらは真っ二つに斬らなきゃ。」

「それ、真冬が言うと怖いよ。」

「最高の褒め言葉だね。」

真冬は悪戯っぽく薄く笑い、軽く俺の肩を叩いた。

「今日遊びに行くよ。」

「いいよ。桃華も喜ぶ。」

「じゃ、帰りね。」

真冬は早足で歩いて行った。俺は真冬の後ろ姿を見送って廊下を曲がる。

(ロリータか……………)

あの二人の言葉を思い出して溜め息をつく。

(一応あれでも同じ年なんだよな)

心の中で呟いてもうひとつ溜め息を吐いた。

第三話 円熟

「優詞の家に行くのもなんだか久し振りだな。」

「ハンドルを指で叩きながら真冬が言った。独り言なのか話を振られたのかよく分からなかったが、とりあえず頷く。

「何かと忙しかったからね、真冬。彼女とも色々あったんでしょ。

「……………あ、今日は彼女とは会わないの？」

「うん。あっちも仕事忙しいし、俺も学生だし、そんなしょっちゅう会わないよ。会っても一カ月に一回会うか会わないかね。」

「クールだなあ。」

「円熟したんだよ。」

ふざけた様に笑い、肩を竦める真冬。渋滞につかまり、

「やられた」

と声を漏らす。

真冬の彼女は七つ年上の二十九歳で、モデルをしている。最近は何国に行くことも増えたらしく、忙しさや他にも色々重なって意思の疎通がはかれずに何度か破綻寸前まで行ったんだとか。もちろん、金本達は真冬の彼女がモデルとは知らない。知られたらどんなことになるか考えただけで恐ろしい。

そして真冬の彼女も性格が子供っぽい。俺も一度だけ会ったことがあるが、桃華となんとなく似ているところがあつた。まあ、桃華程子供ではないが。

「よく続いでるよな、真冬」

「まーね。俺もそう思う。よく終わらないなって。ま、今でも万事上手くいつてるってわけじゃないけどね。それはどこも一緒だろ。」

軽く目を細める真冬。

「お互い、色々ありますねえ。」

「そうですねえ。」

ふざけて笑い合い、少しずつ進んで行く車の列をなんとなく見て

呼吸

いた。

第四話 一步、前に進む

「ただいま。」

ドアを開けると、何やらご飯のにおいがした。キッチンからは「おかえりなさい。」

という声と食器のぶつかり合う軽い音。

首を傾げて靴を脱ぎ、キッチンへ向かう。

「おかえりなさい。あ、真冬くんも来たんだあ。」

桃華が食器を両手ににっこり笑った。俺は信じられない気持ちでいっぱいだった。

桃華が、食事を作っている。しかも、自分から。仕事や作業を極端に嫌う桃華が。

「すごいな、桃華。大丈夫だった？一人で作って。」

「うん。なんか、作りたくなったの。急に。いつもゆうくんが作ってるもんね。」

「よかったな。丁度真冬も来てるし。」

「うん。真冬くん食べて行ってねー。」

「ありがと。是非食べてく。」

嬉しそうに微笑む桃華。真冬は穏やかな微笑でそれに応じる。

俺はまだ信じられないまま椅子に腰掛けた。桃華がキッチンに立っているのはなんだか妙だった。

少し前までは、只窓の外を眺めているだけだったのに。

「はい、出来上がりー。」

全てテーブルに並び終え、桃華はちよこんと俺の向かいに腰掛けた。本当に手際がいい。毎日食事を作っている主婦並だ。

ご飯に味噌汁、茹でたキャベツにコーンとシーチキンを和えたサラダ、メインは肉じゃが。本当に桃華一人で作ったんだろうかと疑いたくなる。

「あははー。ゆうくんびっくりしてるー。」

呼吸

面白そうに屈託無く笑う桃華。俺の反応が予想通りだったという
感じだ。

「そりゃ、びつくりするよ。……………じゃ、いただきます。」

俺が箸を取ったのを合図に食事がスタートした。

「美味い。」

まず真冬が呟いた。ホクホクのジャガイモを口に頬張っている。

「……………美味しい。」

本当に美味しかった。密かに勉強していたんだろうか？と思った
りもした。でも桃華は、一切書物に触れないから、それは有り得な
いだろう。

「よかったー。」

頬にご飯粒を付けて、桃華は笑う。俺が取ってやると

「くふふ」

と笑みを零した。

いつもと変わらない笑顔。その笑顔に安堵を覚え食事を再開した。

桃華が笑っていてくれたら。それだけでいい。

それ以上は、何も望まない。

「桃華ちゃん、相変わらずで安心した。」

桃華は、疲れてしまったのか夕食が済んだらすぐ眠りに行ってし
まった。真冬と俺はビールを片手にのんびりタイムを過ごしている。

ビール缶を弄びながら真冬は穏やかに話す。

「ほら、俺が桃華ちゃんに会ったばかりの時は酷かっただろ？表情
なんて無かったし、まるで敵を見る様な目をしてた。お前のダチっ
て分かってても暫く警戒してたもんな。」

「一番酷い時に会ったからね、君達。」

真冬の台詞に苦笑する。

「今じゃ兄と妹になってるけどね。でも、真冬くらいだよ。俺以外

に桃華が心許しているのは。」

「そつだろつね。」

当然の様に頷く真冬の顔には、淡い笑み。『当然だよ』という様な自信に満ちたその笑みに俺は吹き出してしまった。

「何笑つてんの。」

「いや……………つくづく、真冬は自尊心があるんだなあって思っただけ。」

「そつかな。事実をありのまま受け止めたただけなんだけど……………でも、優詞も桃華ちゃんも、少しずつ自尊心が戻つて来たね。」

「は？」

ぼかんとした俺に、強烈なでこピン。思わず声が出てしまった。

「いきなりしなくても……………痛い。」

「攻撃は予告無しにするものだよ。痛いのは当たり前。」

額をさする俺に真冬は容赦無い。そして呆れた様に溜め息を吐いた。

「いい？優詞は桃華ちゃんに『笑顔』を思い出させ、桃華ちゃんは優詞に『必要とされていること』を思い出させた。互いに互いの持っている賜物を蘇らせたわけでしょ。二人共、ズタズタだった自尊心が戻つて来てるよ。それに自分で気付いたらもつといいね。」

「……………はあ。」

よく分からないという様に相槌を打つ。

真冬はビールを呑み干して缶を小さく潰し、俺を見た。

穏やかないつもの微笑。

「いい？優詞。《自尊心》と《誇り》は違う。誇りは棄てたつて構わない。生きて行ける。でも、自尊心が無いということは『自分の価値を見失う』ということ。それが酷くなると、生きる希望を失うんだ。生きようと思わなくなる。」

少し前の桃華ちゃんの様だね。そう言つて真冬は目を伏せた。

「自尊心と“元気である”つていう事は必ずしもセットではないけど、そうであるケースも多い。優詞と桃華ちゃんが笑っている姿を

見るだけで俺は安心する。『自分を取り戻せたんだ』って思える。』
まるで兄の様な、父親の様な台詞。同い年の口から聞くには違和感を感じる台詞。

それでも真冬の口から流れ出れば、重く説得力のある言葉になる。俺は肩を竦めて苦笑した。

「はは。真冬のお陰でもあるけどね。」

俺がこうしてここに居るのは

そう言うとき真冬は人を安心させるいつもの微笑みを浮かべ

「そうだろうね。」

穏やかな口調で綴った。

真冬が帰った後、風呂に入ったり歯を磨いたり……と寝る仕度が整ったのは午前二時を過ぎた頃だった。特別遅いというわけでは無いが、そんなに長話をしていたのかと驚いた。

相手が真冬だからだ。おまけに、お互い二人だけで話したい“ぶっちゃけトーク”が積もっていた。

お互い、お互いにしか言わない本音。大学のことであつたり、家族のことであつたり、彼女のことであつたり。論題はくだらないものから他言できない秘話まで様々だ。

昔からだつた。どちらかが言い出すわけでもなく、自然とそんな雰囲気になる。誰にも打ち明けないことを互いに吐露した。

真冬が、俺の並べる言葉を一言も漏らすまいと一心に聴いてくれるのが、俺に本音を隠さず語ってくれるのが嬉しかった。

その“ぶっちゃけトーク”に俺は随分助けられた。今思えば、それがあつたからこそ、どんな時もどんなことも乗り越えられたのだろう。どんなことがあつても、真冬は俺を見捨てなかつた。

俺が父親に離縁され、見離された時も。

必ず側に居てくれた。俺の力になってくれた。

(ホント、感謝だなあ)

ひとつ、大きな欠伸。

そろそろ寝よう。

ベッドの横にある淡い間接照明の光が、寝室を橙色に染めている。その照明のすぐ側に、すやすやと子供の様に眠る桃華。俺は照明の明るさを一段落とし、桃華の側にそっと寝そべった。

と、その振動で桃華が目を覚ましてしまった。うつすらと瞼を開く。

しまった。気を付けていたのに。

「あ、ゆうくん。おやすみなさあい」

「……………おやすみ」

それだけ言うと、桃華は再び眠りに落ちた。ちょっと拍子抜けしたものの、その寝顔に微笑みが零れる。

こんな無防備な姿を自分に見せてくれる桃華の側に居れる、今はそれが自分にとっての『全て』なんだと改めて思った。

ずっとこのままだったら。俺はそう願って眠りについた。

『何も無い』筈が無い事は知っているけれど。

でも、それまでは。

第五話 出逢い

俺と桃華の出会い、高校一年の春、塾という学生の戦場での事だった。

特別な出会い方をした訳じゃないし、ロマンチックなシチュエーションがあった訳でもない。俺と桃華が通っていた塾は、そんな事とは一切無縁な場所だった。

超一流大学を目指す為の超一流学習塾。宿題は毎日膨大な量出され、授業は無理矢理の詰め込み。規定の点数を満たせない生徒は補習を受け、問答無用で更に宿題を増やされる。塾の指針に文句がある訳じゃないし結果も出しているのでとやかく言うつもりは無いが、そういう場所で俺達は出会った。

最初に桃華の存在を認識したのは、塾で月一度ある総合テストの席次発表があった時だ。そのテストで十位内に入れない生徒は補習と宿題の追加があるのでみんな必死になる。

そして席次表が張り出された瞬間、獲物に向かう蟻の集団の様に群がる血眼の生徒達。

俺は人だかりが引いてから見に行こうと、座ったまま人だかりを見ていた。高校の合格発表の時の様な騒々しさは、仕方無いとは言えうんざりだった。そういう、熱気に満ちた場所は苦手だったりする（この学習塾も十分熱気で満ちているが）。

溜め息をついてふと視線を横に向けると、斜め前の席で独りぼつんと座っている女子生徒が目についた。長い漆黒の髪が印象的だ。彼女の何かするわけでもなく、只そこに座っている。

俺と同じ様に、人が引いてから見に行こうと思っっているんだろうな、と思った。制服を見る限り、同じ高校だということも分かった。その頃はその程度だったけれど。

そして数十分後、ようやく騒ぎは静まり、俺は重い腰を上げた。

呼吸

ほぼ同時にあの子も立ち上がる。

席次表を、教室に残った二人でゆっくり見上げる。表には上位十人のみの名前が記載されている。それから外れたらゲームオーバー、という感じだった。

俺の名前……は。

「……………あつた。」

三位、四九八点。二点間違えて三位か。悪くない。ほっと一息ついた。

そして隣で心配そうに表を見上げる、小柄な彼女。名前は知らないで、その反応を試してみる。

「……………あ、あつた……………」

「お、おわっ!?!」

彼女は小さく呟き、同時に脱力した様に崩れた。俺は驚いて反射的に彼女の腕を掴まえた。

「だ、大丈夫?」

「あ、ごめんなさい。ちょっと安心し過ぎちゃって……………」

はは、と少し泣きそうな笑顔。満面の笑みではないけど、すごく純粋な笑顔だな、と思った。

「良かったね、名前あつて。はい。」

手を差し出すと、彼女は先程とは違う屈託無い顔で笑って俺の手を取った。小柄で華奢な体は、片手でも軽々だった。

「ありがとうございます。音咲優詞君。噂通り優しい人ですね!。」

「へ?」

俺は彼女の言葉に、素頓狂な声を出した。

彼女はその屈託の無い、飾らない笑顔で言う。

「学校で有名ですよ!。優しくて頭も良くてカッコイイ、まさに女の子の理想の王子様。」

「……………」

「桃華が言ったわけじゃないですよ!。でも、優しいですね。」

「普通……………だけどなあ。」

「これが普通だったら、それは音咲君の賜物ですねー。飾らない優しさを持っているんですよ、音咲君は。」

彼女は言い、首を傾げた。

「私が音咲君の名前知ってるのに音咲君が桃華の名前知らないっていうのはフェアじゃないですねー。私は、浅葱桃華あさぎです。よろしくお願いします。」

そして、突然の自己紹介。俺は不意を突かれて一瞬言葉を失った。「え、と……ああー……音咲優詞です。よろしく」

「音咲君。これからよろしくお願いします。それじゃ、また明日！」

「
そう言っただけで彼女は、子供の様に手を振り身を翻して帰って行った。俺はただぼかんと彼女の後ろ姿を只見送っていた。」

その時はまだ相手を意識していなかった。お互い、これっぽっちも。

「とーかの親はねー、勉強は特にとっても厳しいよ。満点取らないととつても怒るの。」

「俺のとも似た方だけど、そこまでじゃないなあ。」

「超一流大学じゃなきゃ駄目なんだってー。」

「あー……なるほど。仕方無いのかなあ、こういう学校通ってたら。」

「おとーさんは仕事であまり帰って来れないんだけど、帰って来たら『勉強はどうだ』って訊くの。そればかり心配みたい。」

「桃華の心配しているんだよ。きつと。」

「でも、淋しいよ。とーさんと話するのが、それだけだもん。」

「そうだよな。もつといるんな話したいよな。」

「でも勉強の事は、やっぱりかーさんの方がうるさいの。大学受験失敗してるから。って。」

「うちは父さんの方が怖いかな。」

「おかーさんはー？」

「父さんの権力が強すぎて何も言えない。」

「あらー。亭主関白なんですねー。」

数ヶ月もすれば、互いの家族のことや将来の希望などを語り合う仲良しになっていた。それでも“恋仲”ではなかったけれど。

それは三年生になっても変わらなかった。周りに言わせれば『仲良いのに付き合っていないの？』らしいが、そんなつもりは微塵も無かった。それは桃華も同じだ。仲良くじゃれあう友達だった。『付き合う』という概念が無かったのかもしれない。

しかし三年の半ば頃から、桃華の様子が少しおかしくなった。絶対に休まなかった塾を休みがちになり、学校も来たり来なかったり、が続いた。あの屈託無い笑顔は疲労を隠す作り笑いになった。どうしたのか尋ねると

「ちよつと疲れただけだよ。大丈夫。」

の一点張り。俺は不安に襲われたが、無理矢理聞き出す術を持たない俺は、どうすることもできなかった。

そうこうしているうちにセンター試験に入り、無事合格した俺達は別々の大学へと進学した。

その後何度か連絡を試みたが、桃華が何処で何をしているのか突き止めることはできなかった。電話も繋がらず、メールも返って来ない。家に行っても

「あの子を放っておいてほしい」

と追い返される。俺は桃華の心配をしながら毎日過ごしていた。

そして大学進学から数ヶ月経ったある日、俺は突然桃華の母親に呼び出されることになる。

それが

変わり果てた桃華との再会になるとは思ってもいなかった。

第六話 手をつないで（1）

「ゆうくんおはよー。朝だよ、起きて。」

「ん……………桃華早いね、珍しく。」

「うんっ。だって、今日はゆうちゃんと初めてのデートだもん。」

桃華はにっこり笑い、俺の寝ぼけた顔を覗き込む。

「そうだったね。」

遠足当日の子供の様にはしゃぐ桃華に自然と笑みが零れる。ひとつ大きな欠伸をしてベッドから起き上がる。

閉められたカーテンを開けると、外はしとしとと雨が降っていた。

「雨だね、桃華。」

言つと、桃華は首を傾げた。

「デートは延期？」

「え？いや、そういう意味じゃないよ。」

「雨でも桃華は平気だよ。ゆうちゃんとデートだもんっ。」

にっこりと微笑み。

「そっか。」

俺は桃華に微笑み返して洗面所に向かった。

今日は土曜日。桃華と初めて外出する。

かれこれ桃華とは三年程一緒に暮らしているので、今更初めてのデートというのはおかしいかもしれない。でも、桃華の場合仕方無いと言えば仕方無いことだった。

ここに来てから、桃華は外出を嫌がった。理由はよく分からないが、絶対に外に出ようとしなかった。桃華と外の世界をつないでいるのは、桃華自身が開け放つリビングの窓のみだ。

何もかも遮断したかったのかもしれない。自分を取り巻くものから逃げていたかったのかもしれない。

どんな理由があったにせよ、桃華が外出したいと思ったことは、桃華がいい方向に向かっているということだった。以前の元気だっ

た頃にまたひとつ近付いているということ。だから俺は素直に嬉しかった。

「うわー。」

「ん？どうした？」

力の抜ける様な桃華の声が寝室から聞こえ、丁度歯磨きを終えた俺は寝室に向かった。

桃華はパジャマのまま、まだベッドの上にぺたんとして座り込んでいた。俺が顔を覗かせると、俺に目を向けた。

「忘れてたー。外に着けてく洋服が無いの。」

「え？」

俺は一瞬目が点になったが、すぐに理解した。

今までずっと家から出なかった桃華は、いわゆる『家着』しか持っていない。ここに引越して来た時桃華の荷物は殆ど全て実家に置いてきたし、桃華が必要を感じなかった為、外出時の服は一切持ってきていなかった。

俺は桃華のタンスの引き出しを引き、とりあえず一番人目を引きにくい服を取り出す。ベージュの長ズボンと黒の薄い長袖の上着。

桃華の家着だが、まだましだろう。

「じゃ、とりあえずこれ着て。今日は桃華の洋服買いに行こうか。」

「ほんと？わあいつ。」

桃華は嬉しそうに笑ってベッドから降り、早速着替えを開始した。俺はそれを確認して、キッチンに朝食を準備しに向かった。

「雨、強くなってきましたねー。」

雨を払い除けるワイパーが這うガラスを見ながら助手席に座る桃華は楽しそうだ。台詞とは裏腹に屈託無く笑っている。

「ゆうくんの車乗るの初めてじゃない？」

「え？こっちに移ってくる時に乗ったよ。」

「三年くらい前かー。覚えて無いなー、桃華。」

桃華は首を傾げて雨に濡れる外の世界に目を向けた。
覚えていないとしても、仕方無いだろう。あの時の桃華は、只必
死だったのだから。

否。

桃華の世界には、桃華と俺しかいなかったのだから。

桃華に目を向ける。桃華は初めて見る外の世界を、上半身を窓に
向かって捻り、窓に食い入る様に見ていた。本当に子供の様に。

「ねーゆうくん。今日はどこに行くの？」

俺を振り返って問う桃華。期待に輝く目に安堵を覚える。

俺はウィンカーを入れながらその問いの答えを返す。

「『CO-ZAH』っていう店。結構お洒落な服をたくさん置いて
てね。真冬が経営してるんだ。」

「ほえー。真冬くんが？すごい。スーパー大学生だったんだねー、
真冬くん。」

「本人曰く真冬は『自由奔放な店長』らしいけど。だから今居るか
は分からないけどね。でも楽しいみたい。」

「楽しみだなー。」

目を輝かせる桃華の声を聴きながら、俺は穏やかな気持ちでいっ
ぱいだった。

「いらっしやませー。」

「いらっしやませー。」

『CO-ZAH』に入ると同時に、店員達の声。笑顔での接客だ。
桃華はきよるきよると店内を見回しながらとても楽しそうだ。

店内は商品の配置はさることながら、照明や細々したところまで
こだわりが感じられる。接客からも分かるが、いかに真冬が徹底し
ているか窺い知ることができる。

「すごい。すごいね、ゆうくん。」

「でしょ？真冬居るか訊いたみようか。」

俺はすぐそこで洋服をたたんでいた店員に声をかけた。

「すみません。店長の滝柳さんおられますか。」

「はい、おります。お呼びしますね。少々お待ち下さい。」

店員は笑顔で答えると、パタパタと走って行った。俺は桃華に

「居るって。良かったね。」

と言う。

するとすぐ、向こう側から真冬が歩いて来た。『CO-ZAH』のスーツをさらりと着こなし、大学とは全く違う雰囲気をもとっている。

でも、振る舞いはいつもと同じだった。

「いらっしやい。今日は桃華ちゃんも来れたんだね。」

「うん。」

俺は真冬の笑顔に返した。

「今日は桃華の服を買いに来たんだ。桃華、外出用の持って無いから。」

「そっか。ゆっくり見てってよ。あ、選んであげようか、桃華ちゃんに似合う服がいくつかあるんだ。」

「助かる。桃華、真冬にお願いしようね。真冬センスあるから。」

「うん。」

桃華と俺は真冬の後が続いた。真冬はもうイメージが出来上がっているのだろう、迷わず進む。

なんとたつて、ここ『CO-ZAH』の服は、彼がデザインしているのだから。

「試着してみなよ、桃華。」

「うんっ。」

桃華は嬉しそうに頷き、真冬が特に勧めていたワンピースを受け取って試着室に入った。

俺はそれを確認して、店内をぐるりと見回す。洒落た店内には、少しセレブの雰囲気を持った客が多い。ここ『CO-ZAH』はこだわりで知られるブランド店。真冬はこれ以上忙しくなるのを嫌が

って店舗を拡大しないのだが、口コミで人気が広まりつつあるらしい。著名人や有名人が最近よく来るといふ。

（大学が本業なのかこっちが本業なのか分からないよな……。しかも忙しくなるから嫌だっ……。）

少し笑えた。以前真冬は

「これ以上彼女に会えなくなったら本当に終わりだからね」

と言っていた。店舗を拡大しないのはそれが理由らしい。その理由を聞いて、真冬らしいと思っただのを覚えている。

「ゆうくん。」

試着室の中から桃華が俺を呼んだ。ここに居るよ、と返すと、桃華は試着室のドアを開けた。

春らしい、フレアのワンピース。淡い桃色をベースに、品がよく、そして可愛らしさを引き出す様なデザインになっている。桃華はとても小柄で華奢なのでサイズが気になったが、要らない心配だった様だ。真冬が言っていた通り、とても似合っていた。

まるで桃華の為にデザインされたのかと思う程に。

桃華は照れた様に俯いて腕を後ろに回し、体を揺らした。

「こんな服着るの初めてだからなんか嬉しいなー。」

「すごい似合ってる。」

素直に感想を言うと、桃華は嬉しそうに肩を竦めて笑った。

そんな桃華の様子を、二人組の女の子が微笑んで見ていた。

「可愛いね。」

と口々に言っ。

しかし次の瞬間、桃華の何かを目にした彼女達は、ぎょっとした顔をし、ヒソヒソと何か話しながら離れて行った。俺は状況をよく理解できず、桃華に目を向けた。

桃華は恥ずかしそうに俯き、彼女達から身を隠す様に試着室の奥の鏡に背を付けていた。

「……………桃華？」

俺が桃華の名を呼ぶと、桃華は泣きそうな笑顔で俺を見ていた。

申し訳なさそうな笑い顔。

「…………… ゆうくん。」

「なに？」

「このワンピース可愛いんだけど……………。腕が出るから恥ずかしいかも……………」

「あ……………」

桃華の言葉で、ようやく理解できた。俺は桃華の右腕に目を向けた。

彼女の極細の右腕には、肩から二の腕を経て肘あたりまで生々しい大きな切り傷があったのだ。傷が大きくまた複数あり、とても目立つ。あまりに目立つその傷に、彼女達はああいう反応をしたのだ。俺は不意に、さっきの真冬の言葉を思い出した。

「桃華。真冬がカーディガンがあるって言ってたよ。取って来ようね。」

「え、いいよ。」

「大丈夫だよ。気に入ってるんでしょ？」

「…………… ごめんね。」

いいのいいの、と俺は真冬に教えてもらった場所へカーディガンを取りに行く。ニットシャツもあると言っていたのでそれも探す。

その二つを持って試着室へ。桃華は顔を赤らめて

「ありがとう」

とカーディガンを取り、さっと羽織った。カーディガンも可愛いさが引き立つデザインだった。

「可愛いー。」

とても気に入った様で、鏡の前でぐるりと一回転する。こんなにはしゃぐ桃華は久しぶりに見た気がした。

「あ、ゆうくん。一つ気になったんだけど……………」

「なに？」

「ワンピースの値段が千円代より一つ零が多いのは普通？」

「普通だよ。」

返すと桃華は

「そーかー」

と笑った。まだ鏡の前で回っている。

「これ、全部買おうか。」

「え！」

動きを止め目を見開いて俺を見る桃華。目をぱちぱちしばたかせる。

「全部って、全部!？」

「うん。」

驚いて口をパクパクさせる桃華に俺は微笑んだ。

「桃華の洋服買いに来たんだし、丁度いいんじゃない? 気に入った服でしょ? 他の服も真冬が選んだんだから大丈夫だよ。」

「じゃなくてっ。」

「お金のことは心配要らないよ。」

気休めなんかじゃなく、俺はそう言っただけで微笑んだ。

「甘えていいんだよ、桃華。甘えてくれたら俺も嬉しいし。」

俺と桃華の仲でしょ? と微笑む。

桃華は、はは、と小さく笑った。どう反応したらいいのか戸惑っている様だった。きつと桃華は、物をねだったことが無いんだろ。欲しいものを欲しいと言ったことが無かったのかもしれない。だからどう甘えたらいいのか分からないのかもしれない。

「じゃ、レジ行こうか。あ、そのままそれ着てたらいよいよ。そのまま精算しよう。」

俺は桃華の手を取り、靴を履くのを手伝う。履物も買ってあげようと思っただ。

レジに向かうと、丁度手が空いた真冬が近付いて来た。桃華を見て

「すごく似合ってるね。」

と微笑む。

「ね、似合っただけでしょ。」

「うん、ありがとう。これ、全部よろしく。」

「ありがとう。今日はサービスで全部あげるよ。」
「え？」

さらりと出てきた言葉に、同時に俺と桃華は声をあげた。真冬は涼しい顔で俺達に微笑みかける。

「親友の特権だよ。サンダルも入れとくね。」

当然の様に言い、真冬は新作のサンダルを袋に入れた。俺達は言葉を手放して真冬の顔を見ていた。全部って……いくらになるか分かっているよね？真冬。

真冬は丁寧に服をたたみ、一つ一つビニールの袋に入れていきながら言う。

「初めてのデートでしょ？俺は応援しかできないから記念にもらってよ。俺からのささやかなプレゼント。」

「ささやかじゃないよ……。いいの？こんなに……」

「いーの。甘えなさい。」

言い、真冬はレジのカウンターを迂回してきた。お待たせ、と袋を差し出す。

「ありがとう。真冬。」

「どういたしまして。桃華ちゃんも良かったね。」

「うんっ。真冬くんありがとう。」

真冬は桃華の頭にぽんと手を置き、俺の肩を掴んだ。頑張ったな、と言われた様な気がして俺は笑った。真冬は小さく頷き、じゃ、と仕事に戻って行った。

「ゆづくん。」

「ん？」

「ありがとう。」

桃華が俺の腕に抱き締めて言った。今の桃華の気持ちが溢れた仕事だった。

「どういたしまして。」

俺は桃華に微笑んだ。

第七話 手をつないで(2)

それから数時間。

ひたすら走り回って街の様子を見て回った俺達は、イタリア料理のレストランに入った。ショッピングセンターの中に居たので時間の感覚が狂っていたが、外に出た時は既に日が暮れていた。

「すごい。レストランなんて十何年振りだろー。」

レストランに入るのが久し振りらしく、桃華はレストランに入り店内をぐるりと見回して呟いた。席まで案内するウェイターについていく。桃華はまるで親について回る子供みたいだ。

席につく前に桃華が俺の袖を引いた。

「ゆうくん。あの、トイレ行きたい。」

「奥だよ。ここ真っ直ぐ行って右。」

ありがとう、と小さく呟いて桃華はお手洗いに向かった。少しだけ、大人になった後ろ姿だった。

椅子に腰掛けて、一つ溜め息をつく。

今日桃華がこんなに体力が持つとは正直思っていなかった。家でずっとしゃぼん玉を吹いていた桃華が、今日後半は俺を引っ張る様にはしゃいでいた。多分俺の方が疲れているだろう。

でも、本当に嬉しかった。疲れているけど、それ以上に喜びでいっぱいだった。

桃華が幸せそうに笑ってくれた。それだけでこんなに幸せな気分になれる。

「三年経ってるんだよな……………」
小さく呟く。

桃華の中の時間が止まっていたとしても、外の世界の時間は確実に進んでいる。

真冬の店で晒された、桃華の昔の傷痕。それが時の流れを証していた。

不意に、桃華に再会した時のことが蘇ってきた。

大学に入学して、約半年後。まだ桃華と連絡が取れない日が続いてきた。俺は携帯を取り出し、待受画面を見つめた。メールを送っても、多分返事は来ない。電話も同様だろう。

俺は溜め息をついて携帯をしまった。そして帰ろうと歩き出した。と、その時。

ポケットに入れてある携帯が振動した。俺は携帯を取り出し、画面を見て自分の目を疑った。

相手は桃華。俺は驚きと喜びに踊る胸を落ち着かせ、通話ボタンを押した。

「もしもし。」

『 ゆうくん ですか。 』

しかし電話口に出たのは桃華では無かった。桃華では無いが、『 ゆうくん』と桃華しかしない呼び方で俺を呼んでいる。俺は半ば混乱しながらそれに答える。

「……………そうですが。」

『 今すぐうちに来てくださらないかしら。今すぐ来て下さい。 』

「あの、どなたでしょうか？」

『 急いで下さい。桃華が……………桃華があなたを呼んでいるんです。 』

その女の人から出た名前に、心臓を掻き裂かれたかの様な錯覚を覚えた。俺は携帯をぎゅつと握りしめる。

とても、嫌な予感がする。

「分かりました。すぐに伺います。」

俺は答えずに走り出した。

呼吸

桃華の家に着くと、桃華の母親が外に出ていた。俺が来るのを待っていた様で、俺を見つけると、門まで出てきた。その表情から、

何か緊迫したものを感じる。

今まで桃華の様子を見に来た俺を追い返していた母親が、わざわざ俺を呼ぶ。それが意味することとは。

「あの、どうされたんでしょか。」

息を整える間も置かず、俺は母親に尋ねた。母親は何かにか酷く怯えている様だった。

母親は、とにかく中へ、と急かす様に俺を家の中へ案内した。説明もそこそこに、そのまま階段を駆け上がる。

そして一つのドアの前で立ち止まり、俺に目を向けた。必死に助けを求める様な切羽詰まった表情に俺も顔が引きつった。

母親はドアに目を向け、下唇を噛んで唸る様に言葉を発した。

「この……ドアの向こうに桃華がいます。あの子の有様に、驚かれるかもしれませんが、どうか助けて下さい。」

「あの、有様ってなんですか。」

「見た方が分かります。誰の声にも耳を貸さず、近付くと暴れるのです。あの子があなたの名を叫んだので、あの子の携帯からあなたに連絡したんです。」

後で聞いた話では、こうなったのは約半月前、本当に突然発狂した、ということだった。策を出し尽くし、桃華が只口にした『ゆうくん』という名を聞いて最後の手段として取り上げていた携帯から俺に連絡をした、ということだった。

俺はまだ事態を把握していなかったが、桃華が何かとんでもないことになっていることだけは分かった。

意を決してドアノブを掴む。その冷たさが異様に手の平から伝わってきた。ノブを回す手は震えている。

「……………」

部屋を見て、文字通り俺は言葉を失った。あまりの悲惨さに恐怖すら感じた。

破壊。

部屋の中の物がことごとく破壊されていた。

壁には鈍器で殴った様な無数の穴。カーテンはズタズタに引き裂かれ、殆ど残っていない。窓硝子は割られ、破片が散らばっている。タンスも壁と同じ様に穴だらけになっていた。

ベッド上の布団はズタズタに切られ羽毛が舞っている。そこに飾ってあったかもしれない縫いぐるみは、ひとつ残らず切断されバラバラにされていた。

机の上やその周りに散乱する教科書や参考書やノートは、原形をとどめない程バラバラにされていた。絵の具や墨汁が飛び散り、辺りを不気味に染めている。壁に掛けられた服はやはり破られ、ナイフが刺さっていた。

破壊された椅子。焼け焦げた、照明のプラグ。折られたシャーペン、カッターの刺さった消しゴム。外しか残っていない時計、ぼろぼろにされたカバン、割れた写真立て、差し込み部分しか残っていない蛍光灯。破壊の手を逃れたものは何も無かった。

そして

「……………桃華。」

桃華が居た。

破壊された部屋の隅、全てを拒絶する様に、角に桃華が居た。

膝を曲げて小さく座り、耳を覆う様に両手を添えて深く俯いている。その体は、とても震えていた。その桃華の姿に胸が締め付けられる様に感じた。

「……………桃華。」

俺は桃華を呼んだ。

すると桃華は、俺の声にビクリと体を反応させた。耳を塞ぐ手を除け、ゆっくり顔を上げる。

酷くやつれた顔。あんなに輝いていた目は濁って光を映さなくなっていた。表情は死人に近い。長かった髪は不揃いの散斬りになり、体のあちこちに大小様々な斬り傷。特に右腕の傷は深いのか、右腕

呼吸

全体が固まった血で紅黒く染まっている。

一体何があったんだ。

俺は躊躇うこと無く桃華に歩み寄った。破壊された物の上を通り、桃華に近付く。

「……………桃華。俺が分かる？」

俺は血で汚れた桃華の顔を両手で包み、桃華の目を見た。酷く淀んだ桃華の目。

桃華は虚ろで何も映さない瞳を俺に向けた。その瞳には、しっかりと俺が映っていた。

「……………ゆうくん？」

微かな声。

久し振りに耳に入ってきた桃華の声は震えていた。必死に絞り出された声は細く、今にも消えてしまいそうだった。俺は何度も頷く。

「ゆうくん。ゆうくん。」

何度も俺の名を呼び、桃華は震える腕を俺に伸ばした。俺は桃華を抱き締めて背中をさすった。小さな体は、重さがないのかと思う程に軽い。小さく桃華がすすり泣く声が聞こえた。

そして桃華はそのまま気を失った。俺が慌てて抱き直し顔を見ると、その痩せこけた頬に、涙の跡が幾筋もできていた。あまりに悲痛な涙だった。

その時俺は、ある決意を固め始めていた。

それからの俺の行動は早かった。

桃華を病院に搬送し手当てを受けさせている間に、桃華の母親と話し桃華を家から出して俺と一緒に住むということに合意。これは、桃華がこうなった原因が両親にあったからだ。それを母親も分かっていた様で、決まるまでにそう時間はかからなかった。

それから、他県の大学に通っていた真冬に連絡し、近くのアパートを探してくれる様に依頼。驚きながらも真冬は快く応じてくれた。

最後に、自分の父親に、大学を中退し、真冬と同じ大学に再入学することを理解してもらう。これが一番苦労した。

俺が通っていたのは、名門中の名門大学。経歴重視の父親が頷くわけが無かった。

しかも父親は、大企業社長。俺は長男ではないが、父親はその企業の重要なポストに俺をつけようと思っていた。

だから、俺が桃華の話をして分かってもらおうとしても聞く耳を持たなかった。お前がそんなことする必要が無いと一蹴された。桃華と住むなら離縁だ、と。

結局、父親を説得することはできなかった。でも俺はそれを振り切り、大学に退学届を出してそのままこの家に越して来た。俺が離縁されたのはその時のことだ。

正直、自分がそこまでできるとは思ってもいなかった。どちらかと言えば父親の権力に流されてきた。あんなに反対されても自分の意見を強く通したのは初めてだった。そんな勇気がどこにあったのだろうと不思議でならない。

只、必死だった。

桃華を守りたい、そう思った。付き合っていたわけでもなく、恋仲という意識も無かった。でも、俺がやらなければと思った。今考えば、俺はずっと桃華が好きだったんだろう。じゃなきゃ離縁されてまで一緒に居たいと思わないだろう。こうして、三年以上一緒に居ない。

あれから、時折桃華の母親から連絡が来る。桃華の様子はどうか、自分が締め付け過ぎた、悪かった、と。

確かに、桃華の親は厳しすぎた。早朝から叩き起こして机に向かわせ、塾から帰って来ても食事の後すぐに勉強。満点以外は全て不合格と見なし、満点で無いと食事や睡眠を減らしてまで勉強させたという。

休みの日もみっちり勉強。桃華は『遊んだ』記憶が無いという。勉強以外したことが無いと。初めはここまで厳しくなかった様だが、

高校一年の頃からこの上無く厳しくなったらしい。家族らしい会話や気遣い合うことも全く無かったという。

そして桃華は壊れた。
壊れることで、自分を守ろうとした。我慢していたものが爆発した。

あれから彼女は、あらゆる『勉強』が嫌いになった。本は一切読まないし、触れようともしない。そしてしたくないこと、やりたくないことは絶対やらない。それは家事であつても外出であつても同じことだつた。行動を起こすということに対して、どちらかといえば消極的だ。

だから、最近積極的に自分から何かをしようとする桃華を見て俺は嬉しかった。

元気になっている証拠だから。

それ以上は何も要らない。望まない。

「ただいまー。どうしたの？ ゆうくん。疲れちゃったー？」

桃華が戻つて来た。くふふふー、と笑み。

「大丈夫だよ。」

笑つて答えると、桃華も嬉しそうに笑つた。そしてちょこんと椅子に腰掛ける。

「はい、メニュー。桃華先に決めていいよ。」

「ありがとう。わぁ美味しそうっ。」

目を輝かせてメニュー表を覗き込む桃華を見て目を細め、俺は笑みを零した。

桃華さえ居れば。

第八話 危機（1）

「ただいまー。桃華今日は満足ーっ。」

家に入るなり、桃華はソファに直行した。勢い良くダイブし、クッションを抱いて

「くふふー。」

と幸せそうな笑みを零す。俺は

「良かったね。」

と声をかけて上着を脱いだ。椅子の背もたれに掛け、少し休もうとその椅子に腰掛ける。

只今の時刻、午後九時過ぎ。決して遅い時間ではない。しかし、こんなに脱力感が強いのは、朝から走り回っていたからだろう。こんなに遊び回ったのは俺も初めてだった。

何気なく時計に目を向ける。

さつき真冬から連絡があり、仕事帰りにここに寄るということだった。『CO-ZAH』はもう少し開いている筈だが、真冬のことだ、多分そろそろ切り上げて来るだろう。

立ち上がり、荷物を片付ける。桃華の服が殆どだが、桃華の案でお揃いのカップやパジャマなども買った。俺に意見を求めながら楽しそうに選ぶ桃華を見て、『やっぱり女の子だな』と思ったものだ。買ったばかりのパジャマをたたんでみると、桃華が近付いて来た。自分の薄い桃色のパジャマを手に取り、俺を見上げる。

「ゆうくん、着てこようよ。お揃いつ。」

「ははっ。着てこようか。」

先に寝室に走り出した桃華を追いかけて寝室に向かう。

と、チャイムが鳴った。真冬かと思っただが、そのまま入って来ないので違う様だ。俺はソファにパジャマを置いて玄関に向かう。

ドアを開けると、見知らぬ男性が立っていた。年齢は四十後半といったところだろうか。

その男性は、威嚇する様に俺を睨み付けていた。俺は少し戸惑いを覚える。

「あの……………どなたでしょうか？」

少し警戒しながら尋ねる。するとその男性は目を細めて口を開いた。

「浅葱だ。」

その言葉に、俺は戦慄を覚えた。

浅葱。

桃華の……………父親。

「浅葱……………さん。」

俺は浅葱さんを見た。俺の今の表情はきつと恐怖に引きつっているだろう。

浅葱さんは俺を一瞥し、俺を押し退けて中に入って来た。

「な、何をするんですか。」

俺は慌てて浅葱さんの後を追う。浅葱さんは黙って奥へ進んで行く。

浅葱さんが何故ここが分かったのか分からない。でも、何故ここに来たのか分かってしまった。だから、恐怖を覚えた。

浅葱さんは桃華を連れて帰るつもりだ。

駄目だ。桃華に会わせてしまったら。

桃華はまた

「待って下さい、浅葱さんっ。」

「居るんだろっ、桃華！」

浅葱さんは俺を振り払い大きな声で桃華を呼ぶ。止めようとする俺など目に入っていない様に。

桃華が

桃華が壊れてしまう

「桃華！」

浅葱さんが怒鳴りながらリビングに入った時

「……………とーさん……………?」

寢室から出て来た桃華と鉢合わせした。一瞬にして、桃華の目が恐怖に染まる。怯えの走る目を浅葱さんに固定しながら、身が竦んだ様に固まってしまった。

浅葱さんは桃華を見下ろし、怒りを露わにした声色で言葉を発した。

「こんなところで何をしている。お前の家はここでは無いだろう。」
「……………」

桃華は浅葱さんから目を逸らし、深く俯いた。体は小刻みに震えている。俺は急いで桃華の側に行きその肩に手を添えた。

浅葱さんは俺を睨み付け、蔑んだ様な目を向けた。

「で、お前は桃華の《彼氏》というわけか。随分勝手なことをやってくれるな。勝手に桃華と同棲したり、居場所を教えなかったり。ふざけた真似をするな。」

浅葱さんの言葉に、俺は答ええない。俺には俺なりの考えがあつてそれが桃華にとって一番いい方法だと思つた。だからその策をとつたというだけの事。

きつと話しても、浅葱さんには伝わらない。

浅葱さんは再び桃華に目を向けた。

「帰るぞ、桃華。」

その浅葱さんの台詞に、桃華はビクリと体を震わせた。ぎゅっと袖の裾を握り、俯いたまま。その表情は追い詰められていた。

しかし微かに首を横に振つた。

俺はその桃華の答えを見て、浅葱さんに視線を映した。

「そんな突然押しかけられても混乱します。今は彼女をそつとしておいてあげて下さい、浅葱さん。お願いします。」

その俺の言葉に、浅葱さんは更に表情を怒りに満たした。

「なんだお前は。人様の家の娘に手を出して何様のつもりだ。お前に桃華を扶養する理由など無い。」

帰るぞ、と桃華の腕を掴む浅葱さん。桃華は
「嫌っ放してっ！」

と小さく叫んだ。華奢な腕は恐怖に震えていた。
「ちよつと待つて下さい！」

俺は無理矢理二人の間に割り込み、桃華の腕を掴む浅葱さんの手を放させた。桃華は勢い余って床に転がり、勢い良く立ち上がって寝室に駆け込んだ。バタンと大きな音がして、そのドアが閉められる。

浅葱さんは鋭い眼光を俺に向けた。その圧力に負けそうになりながら、俺は必死に浅葱さんを見つめ返す。

そして喉から声を絞り出す。

「浅葱さん。本人の気持ちも聞かずに無理矢理連れて行くこととして、桃華は心を開かないです。お願いです、もう少し彼女をそっとしておいて下さい。」

「偉そうなことを言うな。勝手に桃華をさらっておきながら。」
威圧してくる浅葱さんに、俺は更に言葉をぶつける。

ここで引き下がったら桃華は

「浅葱さんは何が桃華の幸せなのか知っていますか？何が彼女にとっての幸せなのか知っているんですか？」

俺の問いに、浅葱さんは俺に掴みかかった。そして腹部に激しい痛み。

浅葱さんの拳が、まるで鉄球の様に俺の腹に食い込んでいた。

「……………う……………」
遠のきかけた意識を無理矢理引き戻す。しかし意識を保つのに精一杯で、そのまま床に倒れ込んだ。激しい痛みが痙攣している。全身に力が入ってしまい、無駄に体力が奪われているのを感じた。

浅葱さんは俺を一瞥して鼻で笑い、寝室に顔を向けた。

桃華が、連れて行かれてしまう。全身が震える程の恐怖を感じた。また、繰り返されるのか。

(駄目だ……………！)

それだけは

俺は歯を食いしばり、立ち上がった。

「……………はあ、はあ。」

痛みを押して必死に立ち上がりドアの前に庇う様にして立つ俺を威嚇する様に、浅葱さんは仁王立ちになった。

「なんだ、貴様は。若僧の分際で一体あの子に何が約束できると言うんだ？あの子にどんな将来を約束できると言うんだ？一体何が望みなんだ？」

「……………僕は。」

浅葱さんの言葉を遮る様に、俺は口を開いた。

今のこの人に通じるかは分からない。届かないかもしれない。

それでも、言っておきたかった。この人だって、桃華を心配しているだけなのだから。

いつか、きつと届く。

「僕は、桃華と一緒に居たい。それだけなんです。」

顔を伏せたまま、はつきり言葉にする。浅葱さんの心には届かなくとも、耳には届く様に。

それ以上は何も望まない。

桃華が笑っていてくれたら、それだけで十分だ。

「浅葱さんはここ数年の間に、桃華の笑顔を見た事がありますか？どんな顔で彼女が笑うか、知っていますか？僕は最近ようやく、前の様に笑ってくれる桃華を取り戻したんです。僕は……………笑っている桃華と一緒に居たい。それだけなんです。」

桃華が好きだから。

だから。

「だから僕は……………桃華が笑顔を忘れてしまってもいい状況から、離しておきたい。その可能性が少しでもあるなら、無意味やらにその状況に桃華を晒したくない。それが、たとえ父親であってもです。」

偉い口をたたき過ぎただろうか。

絶対に拳か脚かが攻撃してくるだろう。俺はそう予測して体を硬直させていた。しかし、そこに流れたのは沈黙だった。

立っているのが必死な俺は、顔を伏せたままドアにもたれて痛みを耐えていた。自分に向けられている敵意と桃華を失うかもしれないという恐怖に、頭の中は真っ白だった。

それからどのくらい経っただろう。永遠の様な一瞬の様な長い時間を経て。

「……………ふん。」

浅葱さんは見下す様に鼻で笑い、いきり立った足取りで出て行った。勢い良く閉じられた玄関の扉の音を聞き、一気に緊張の糸が切れた俺は、その場に崩れ落ちた。

今すぐ、このドアの向こう側に行きたいのに。

桃華の元へ行かなければいけないのに。

それなのに、体が動かない。

桃華。

俺は君を、君の笑顔を守れたんだろうか。

今君はこのドアの向こう側で、どんな顔をしているんだろうか。

また、笑顔を失ってしまわないだろうか。

「……………桃華？」

俺はドア越しに桃華を呼んだ。返事はない。俺は不安に襲われた。足に無理矢理力を込めて立ち上がる。さっきまで動かなかった足が奮い立たされる。そしてドアのノブを回した。

「……………桃華。」

桃華は、ドアのすぐ向こうに立っていた。

「ゆうくん。」

桃華は泣きそうな顔で見上げた。俺を心配してドアに耳をそばだてていた様だ。またあの時の様になっていないかと懸念していたので俺は少しだけ安心した。

桃華は目にいっぱい涙をため、口を開いた。

「ごめんね、ゆうくん。逃げてごめんね。桃華、怖かったの。おと
ーさんは好きだけど、だけど怖かったの。とつても怖かったの。ご
めんね……………」

桃華はそう言うと、子供の様に泣きじゃくった。俺は腕を伸ばし、
桃華を強く抱き締めた。

こんな時まで、俺を心配する桃華。俺は大丈夫なのに。桃華さえ
居れば、どんなに恐怖を感じても大丈夫なのに。

「大丈夫。大丈夫だよ、桃華。」

俺は安心させる様に呟き、桃華の頭を優しく撫でた。桃華の震え
る体をそつと包み込む。

それから桃華は、俺の胸に顔を埋め暫く泣き続けた。

第九話 危機（2）

真冬が来たのは、浅葱さんが出て行ったすぐ後のことだった。普通ではない俺達の様子を感じ取り、すぐにフォローに回ってくれた。

桃華は真冬が入れてくれた温かいココアを飲み、ようやく落ち着いて今はソファで眠っている。今日一日遊び回ったのと浅葱さんと対面した緊張とで、極度の疲労が溜まっているのだろう。外で大きな物音がしてもいつもの様に目を覚ましたりはしなかった。

俺がぼつりぼつりと事情を話すのを、真冬は時折相槌を打ちながら聞いている。話が途切れても、先を急かすことは無かった。

「今冷静に考えれば、まだ浅葱さんにはちゃんと話してないんだ。」
俯いたまま話し続ける俺の言葉を、真冬は黙って聴いている。

「俺を呼び出したのは桃華の母親で、その時浅葱さんは単身赴任で外国に居たんだ。母親には承諾を得てここに越して来たけど、浅葱さんはきつと状況を知らされていなかったんだ。俺は桃華を守るのに必死で、一番肝心な浅葱さんには何も言っていなかった。怒るのは当たり前だね……………」

俺は深く溜め息をついた。

桃華が自分から両親のことを話す様になるくらい元気になったら、両親に会えるくらい元気になったら、その時にこの場所を教えようと思っていた。それまでは、少し距離を置いてもらおうと。

言い訳にもならないかもしれないが、あの時は精一杯だったのだ。故意にそうしたわけでは無いが、浅葱さんは父親なのに言わば蚊帳の外だった。だから浅葱さんに申し訳無いという気持ちでいっぱいだった。

真冬はそんな俺を慰める様に肩に手を置いた。そして優しい声で言う。

「今はお互いに感情が乱れてるから、まずは落ち着いて。優詞。君はよくやってる。今本当の意味で桃華ちゃんのことを理解して大切

にしているのは誰でもない優詞だ。それは自信を持って。」「
優しい声は続ける。」

「でも、浅葱さんの感情も考慮に入れる必要があるかもしれないね。浅葱さんの愛情が間違った形で表現されているとしても、桃華ちゃんも浅葱さんの娘だから、きちんと説明して理解してもらった方がいい。桃華ちゃんがこれからは安心して優詞の側に居れる様にする為にも。」

会って話すには少し勇気が要るだろうけど、と真冬は口を閉じた。俺は俯いていた顔を上げ、真冬の目に視線を合わせた。全てを包み込む様な穏やかな微笑に、俺の胸は急に苦しくなった。

そして、何かがぷつりと切れた。

「……………あ……………」

視界が霞んで、涙が溢れてきた。緊張の糸が切れたかのようにそれは止まらない。俺は驚いて涙を拭いた。

「う、ごめん。俺どうしたんだろ……………」

涙。自分が泣いているという事実には俺は混乱していた。泣きたいわけじゃないのに涙が出てくる。止めることは叶わなかった。

俺は怯えていたのかもしれない。浅葱さんではなく、『父親』という存在に。いつの間にか『父親』という存在がトラウマになっていた様だ。

「……………っ……………」

浅葱さんに殴られた腹部が痛みだし自分の顔が歪んだのが分かった。堪えきれずに前屈みになる。

真冬はそんな俺の背中を無言でさすった。子供をなだめる様なその気遣いがとてもあたたかい。

「……………真冬ってさ……………なんか、兄貴みたいだね。いつもいつも……………なんか、悪いね。」

俺は辛うじて声を発し真冬に言った。

いつも俺は真冬に助けってもらってばかりだ。何かと世話ばかりかけている。

「気にしてないよ。」

そんな俺の言葉に、真冬はさらりと答えた。

「面倒とか迷惑とか全然思っていないし。ずっと昔からでしょ？俺達の仲は。それに、今優詞が頼れるのって俺ぐらいだし？」

ちよっと茶化す様に言い、真冬は俺にココアを勧めた。

「気にするな。これからもどんどん頼っていいから。ていうか、頼れ。」

「はは、命令だ。」

「そ、命令。」

そして俺は笑った。

「やっと優詞が笑った。」

そう言い、真冬はくっくと笑んだ。

俺は温かいココアの入ったマグカップを両手で包み込む、ほっと一息ついた。

第十話 和解(1)

俺はとても緊張しながら某喫茶店の奥の席に座っていた。なんだかそわそわして落ち着かない。周りから見れば、挙動不審でさぞ怪しいだろう。

普段の俺なら、こんなに緊張することは無い。しかしこんなに緊張するのは、今から会う相手が浅葱さんだからだ。

腕時計に目を走らせる。指定された時間よりかなり早く来てしまったので時間が異様に長く感じた。

(いくらなんでも緊張し過ぎだよな……………。)

自嘲の溜め息をつく。

そもそも何故俺がここに居るかという点。

浅葱さんが家に来た日から幾日も経たない日、俺の携帯に見慣れない番号から電話がかかってきた。その相手は、言うまでもなく浅葱さんだった。また海外出張に行くのでその前に話したいということだった。それで、この喫茶店に呼び出されたのだ。

あの夜のことがあったばかりだ。俺は不安でならなかった。どういう話をする為に呼び出されたのか、何故突然呼び出されたのか分からない。

「……………心臓に悪いよなあ。」

ぼつりと呟く。不安を口にしないと自分の中で感情が爆発してしまいそうだった。

自分から連絡しようと思っていたのに先に連絡が来たので、あまり心の準備ができていないのだ。

特に、『父親』という立場の人と相對するのは、緊張を通り越して恐怖に近いものを感じる。

いつかは必ず越えなければならぬ壁だけだ。

「……………」

ゆつたりと時を刻む秒針を眺めながら、ティースプーンを弄ぶ。

そして俺が顔を上げたその時だった。

向こう側から歩いて来る、スーツ姿の紳士的な雰囲気を持った男性が目に入った。すぐにそれが浅葱さんだと分かった。

ついに対面する時が来てしまった。俺は緊張に背筋が凍る思いがした。冷や汗が背中を伝った。

浅葱さんが、俺が座る席に近付いて来た。俺は立ち上がり浅葱さんに深く頭を下げる。頭を上げると浅葱さんは

「座って。」

と言い、ウェイターにコーヒーを頼んで向かいに腰を下ろした。

「……………」

「……………」

そして、気まずい沈黙。俺は自分から口を開くのを躊躇っていた。何から話したらいいのか分からなくなった。只緊張して固くなった顔を引きつらない様にするので精一杯だ。

浅葱さんはテーブルに手を置き、時間を弄ぶ様に指を組んだり解いたりしている。浅葱さんも、どう言葉にしているか迷っているのかもしれない。

そして僅かな時間が流れた後。

(……………よし。)

俺はようやく意を決した。高鳴る心臓を抑えつけ、からからの喉から声を絞りだそうと口を開く。

真っ白な頭で一生懸命考えた言葉を。

「あの……………」

「あの時はすまなかった。」

俺が口を開くより先に浅葱さんが言った。そのあまりにも意外な台詞に、俺は浅葱さんを見つめる。浅葱さんは俺に視線を固定しただまま続けた。

「突然乗り込んで行った上に暴力まで振るってしまった。大変申し訳無いと思っている。本当にすまなかった。」

そう言い、浅葱さんは頭を下げた。俺は驚いて口を開く。

「いえ、謝らないといけないのはこちらの方です。浅葱さんにきちんと話さないで……すみませんでした。」

俺が頭を下げると浅葱さんは
「顔を上げてくれ」

と言った。顔を上げて見た浅葱さんの表情はとても優しいものだった。

浅葱さんは穏やかな表情のまま、再び口を開いた。

「本当にあの時は大人気ないことをしたと思う。本当に恥ずかしい。君もがっかりしただろう。桃華の父親がこんな奴で。」

「いいえ、驚きましたけどがっかりはしていません。……本当に真っ直ぐな方だなあと思いました。桃華のことを思っているんだと感じました。」

俺が返すと浅葱さんはふつと笑った。照れた様な笑みだった。

「あの後妻と話したんだ。君のことを色々聞いた。……君は高校の頃から桃華を支えてくれていたらしいね。桃華が《ああ》なってしまった時も、真っ先に駆け付けてくれたとか。妻は君のことを『優しく穏やかで、しっかりしていて真っ直ぐな、本当に信頼できる青年だ』と言っていた。人をあまり褒めない妻が言うんだ、きつと君は立派な《大人》なんだろうな。」

視線を外した俺を見つめたまま言う浅葱さん。

「それに君は、桃華と住む為に、離縁される事を厭わなかったと聞いた。しかも君は、あの『音咲グループ』社長の息子だというのに。」

俺はなんだか恥ずかしくなって俯いた。

浅葱さんは背もたれに背中を預け、コーヒーを飲んだ。小さく息を吐く。

「その話を聞いた時に俺は自分が恥ずかしくなった。君は桃華の為に全てを棄てたのに、俺は何もしてないってね。それから君に言わ

れた『桃華の本当の幸せが分かるのか』という言葉が突き刺さった。
「……言い過ぎたと反省しています。」
「いや、あの言葉のお陰で俺は大事なことに気付いたから良かったんだ。目を覚まされた。桃華には君が必要だ。俺達はこの子の何も分かってなかった。あの子を脅す様なことをしてしまった。」
少し淋しそうに浅葱さんは表情を曇らせた。俺は只浅葱さんの顔を見つめていた。

あの、初めて家に来た時の浅葱さんと今の浅葱さんとのギャップに少し戸惑いを覚えたが、きつと本来の浅葱さんは今俺が会っている浅葱さんなのだろう。浅葱さんの口から流れ出る言葉に偽りは無かった。

浅葱さんは、桃華を大切に思っている。

俺は浅葱さんを見た。

浅葱さんに伝えたいことがあった。

「でも浅葱さん。桃華は言っていました。お父さんは好きだって。彼女は怖かっただけなんです。」

その言葉を聞くと自嘲の笑みを浮かべて浅葱さんは肩を竦めた。しかしその表情は少し柔らかくなっていった。

そして浅葱さんは再び俺に目を向ける。

「君は桃華と結婚するつもりなのか？」

「……………え？」

突然浅葱さんの口から出た意外な言葉に、俺は素頓狂な声を出してしまった。浅葱さんは悪戯っぽく薄く笑う。

「そのままだよ。桃華と結婚する気はあるのか？ということさ。」

「……………。」

俺は浅葱さんの顔が直視できず、目を逸らしてしまった。自分の顔が熱くなっていくのを感じた。

自分を落ち着かせようとアイステイーを少し飲む。何度か深く息を吐いて、俺は浅葱さんを見つめた。

浅葱さんの、真剣な目を。

「僕は、ずっと桃華と一緒に居たいと思っています。ずっと桃華の笑顔を見ていたい。だから、時が来たら結婚したいと思います。きちんと誓約をしたいと思っています。」

俺は言った。

今その場しのぎに言った台詞ではない。ずっと前から決めていた事だ。

浅葱さんはうっすらと笑った。

「そうか。」

そう言つと浅葱さんは時計に目を向けた。もう行かなければ、と咳く。

浅葱さんは俺に目を向けた。

「もう少し話したかったが、時間が無くてすまない。……もう少し、桃華を頼んでいいかな。できればずっとあの子の側に居てあげてくれ。あの子が望む限り。」

俺は浅葱さんの真っ直ぐな視線を見つめ返した。気付けば、先程まで感じていた緊張もいつの間にか解けていた。

「じゃあ、別れる前に。改めて自己紹介しよう。」

普通は自己紹介が先なんだが、と浅葱さんは立ち上がり右手を差し出した。

「俺は浅葱潤也。よろしく。」

「音咲優詞です。よろしくお願いします。」

俺も立ち上がり、浅葱さんと握手を交わした。がっちり握られた右手は、俺のことを信頼していると言っている様だった。

「末永くよろしく頼んだよ、息子。」

微笑をたたえて浅葱さんは言い、伝票を持ってレジへ向かった。

俺は浅葱さんの後ろ姿を只見つめていた。

「……………息子？」

呼吸

浅葱さんの最後の言葉を思い出してようやくその意味を悟り、俺は一人顔を赤らめた。

第十一話 和解(2)

「あ……………」

浅葱さんとの話も無事に終わり喫茶店から出た俺は、真上に広がる曇り空を見上げた。予報通りの鉛色の重い空は今にも落ちてきそうだった。

(買い物でもして帰るかな……………)

俺は空から視線を外し、夕飯の材料でも買って帰ろうと駐車場に向かう。

空の色が重くても、心は軽い。ずっと消化できなかったものが消化できた様な、引つ掛かっていたものが無くなった様な、そんな清々しい気分。一番厄介なわだかまりが取れたからだろう。

(ほんと、すっきりしたなあ……………)

車の鍵を取り出し、くるっと手の中で回す。桃華が作ってくれたビーズのストラップが軽く揺れた。

今日はいつもより少し豪華な夕飯にしようか。そんな事を考えながら駐車場に入ろうとした時だった。

「……………」

黒い高級車がすぐ側に停車した。俺は見覚えのあるその車に第六感が反応し、視線が釘付けになった。少し嫌な予感がした。

見ていると車から一人のスーツ姿の男性が降りて来た。そして丁寧に後部座席のドアを開ける。その開けられたドアの向こうから一人の人物が出て来た。

「……………」

その人物は圧倒的なオーラを放っていた。過激というわけでは無い。しかし静かに威圧する様な重圧感が、一糸乱れぬスーツ姿から放たれていた。否、その場の雰囲気を読み込んでいる。

その人物はゆっくりと俺に視線を這わせた。その無表情の目と目が会った瞬間、心臓が破裂するんじゃないかと思う程締め付け

られた。

「……………」

再び、恐怖に似た感情が逆流する。

「流詞兄……………」

それは、約三年振りに合う流詞兄さんだった。

俺はそのまま問答無用で兄さんに連行された。どこに連れて行かれるのか分からず（怖くて訊けなかった）とても不安だった。移動中の車の中で兄さんは一言も話さなかったし、俺も話しかけることはできなかった。

俺が連れて行かれたのは、車で約三十分程走ったところにある豪邸だった。兄さんは何も言わなかったが、多分新しい別荘か何かだろう。

これも『音咲グループ』の社長の特権だろうか。

俺は周りを見回す余裕も無く、只先を歩く兄さんに付いて行く。空気を斬り裂く様に颯爽と歩く兄さんの後ろ姿は三年前とは全く違っていた。

俺が知らない間に、音咲家の時間は進んでいる。

執事が先の大きな扉を開けて俺と兄さんを通した。兄さんは執事を退室させて俺を案内する様に先に歩き、広い部屋に点在するテーブルのひとつにつき様に促した。

兄さんが椅子に腰掛けたのを見て俺も腰掛けた。只浅葱さんと相対していた時とは違う緊張を感じているせいで、座るという行為が酷くぎこちないのが自分でも分かった。

恐る恐る兄さんの顔を盗み見る。

三年前最後に見た時より、少し表情が固くなっていた。家長として、『音咲グループ』社長としての威厳に満ちた表情。というより、威厳が刻まれた表情。

兄さんは俺を見つめ、少しだけ笑んだ。
その笑みは、三年前と全く同じものだった。その微笑に少し安堵
を覚える。

「久し振りだな。」

「……………久し振りだね。」

返事したものの、なんとなく気まずい。

俺は兄さんの目を見れずに目を伏せた。怖い父親に怒られている
子供になった気分だった。

兄さんは窓の外に目を向けて暫く黙った。開け放たれた窓の向こ
うから静かに風が舞い込んでくる。二人の間の時差を埋めてくれる
様に。

「三年、か。」

兄さんは窓の向こうに視線を固定したまま呟く様に言った。抑揚
の無い声は深く頭の奥に響いた。不意に罪悪感が覆い被さってきた。

「……………ごめんなさい。」

それに対して出てきたのは、謝罪の言葉だった。

その言葉に兄さんは眉を顰める。

「何故謝る。何も責めたつもりは無いぞ。」

「え……………う……………」

「出て行ったことが。」

「……………」

凶星だった。凶星以外のなんでもなかった。

知っているなら訊かないでくれ。そう思ったが口にはしなかった。
只俯いて頷く。

兄さんはふつと笑い足を組んだ。

「しかしよくやったよな、お前が。あの親父を振り切って出るなん
て。」

「……………」

兄さんの口から『親父』という言葉が出た時、異様に胸が苦しく
なった。

あれからすぐ父さんは

胸が強く痛んで俺は俯いたまま膝の上で拳を握った。感情が込み上げてきて、必死に下唇を噛み締める。

「またいらん事を考えているな、お前は。」

そんな俺の感情を見透かした様に兄さんは低く言った。俺は弾かれた様に反応し、少しだけ顔を上げる。

そこには、俺の顔をじっと見つめる兄さんの強い視線があった。穏やかな表情。落ち込んだ時にいつも励ましてくれた、あの時と同じ表情が俺を見つめている。

兄さんは『仕方無い奴だな。』という様に淡く笑んだ。

「親父が死んだのはお前のせいではないだろう。お前が出て行ったくらいで心筋梗塞を起こす様な、そんなヤワで神経質な親父だったか？」

試す様な視線で挑戦的な目を俺に向ける兄さん。俺は何も言えなくなつて只兄さんの声を聞いていた。

兄さんは続ける。

「偶然が重なっただけだ。たまたま倒れるより前にお前が出て行ったんであつて、お前が出て行ったから倒れたんじゃない。そうだろ。」

そこに因果関係は全く無いと断言する兄さん。その自信に満ちた様が俺の自尊心を引き止めている様だった。

俺は少し笑った。

表情が固くなつていても、兄さんの中身は変わっていない。まるでずっと一緒に居たかの様に兄として接してくれる。

「それは別として、勝手に出て行ったのは確かに迷惑だった。母親はパニックに陥って落ち込むし、葬式の段取りは俺独りでやらなきゃならなかつたし、仕事だって任せられる適任な人材が居ない。何から何まで俺独りでやらなきゃならぬからな。」

「……………ごめんなさい。」

事実を淡々と述べて容赦無く責めてくるところも変わってなかつ

た。俺は首を竦めて小さくなる。

特に感情が含まれたわけでは無い表情のまま兄さんは小さく溜め息をついた。

「でも俺は、お前がとても羨ましかった。」

「……………」

兄さんの口から出たあまりに予想外な言葉に、俺は言葉を失った。地面に這わせていた視線を兄さんに向ける。兄さんは片方の唇の端をくつと上げた。

シニカルな笑みを浮かべたまま兄さんは続ける。

「自分で『これがしたい』と思ったことを何を失っても全うしようとする 思い を持ったお前が羨ましかった。俺は特に何かを強く思ったことは無いし、絶対に譲れないものが無い。だからそういうものを持っているお前が羨ましい。」

「……………」

俺はただ兄さんを見つめていた。

確かに兄さんが何かに執着する姿は見た事が無い様な気がする。

なるがまま只現実を甘んじている、そんな感じだ。言い方は悪いが、生きることにすら執着していない様に見えた。

今はそうは見えないけれど。前より生き生きしている。

兄さんは足を組み直し、ゆったりと椅子に身を任せた。そして、真剣な表情を作った。その雰囲気、自然と背筋が伸びる。

兄さんの口から出た次の言葉に、俺はまた驚かされることになる。「今日ここに連れてきたのはお前を音咲家の人間として復縁させる為だ。親父がやった離縁を無効にする為に呼んだ。」

「……………」

「なんだ、嬉しくなさそうな顔だな。」

「いや、じゃなくて、びっくりして……………」

俺は冷や汗の様なものが背中を流れたのを感じ、焦りを隠そうと視線を外した。しかし全然隠せていないのを自覚して更に焦る。

あまりに焦っている俺を見て、兄さんは鼻で笑った。馬鹿にした

笑いではなく、本当におかしい時の兄さん特有の笑い方だった。

「俺は離縁に反対も賛成もしてなかった。離縁されたら俺が実権を握った時に元に戻せばいい話だからな。だが……………随分探したぞ。」
だから今になったんだ、とまた俺を責める視線。俺はまた首を竦める。

俺は離縁された時、もう家族と会うことは無いと思っていた。母さんは父さんの権力の前に無力だったし、兄さんは無関心に見えた。だから居場所は教えていなかった。

ということは、ずっと俺を探していたということなのだろうか。俺が出て三年間。

兄さんは立ち上がり、窓に向かった。窓際に片肘を乗せて身を任せる。そして俺に目を向けた。

「まさかお前が他県にまで行っているとは思わなかった。お前のダチに当たれば分かるかと思って滝柳に訊いたら白を切られた。あいつとこんな近いところに居たとはな。全くお前もいい友達を持ったもんだ。」

はっと笑う兄さん。俺は兄さん相手に白を切る真冬が恐ろしいと思うと同時に有り難いと思った。

(全然知らなかった……………兄さんと真冬が会ったなんて。)

あの『恐れ』という言葉を知らない真冬のことだ、兄さんと相對することくらいどうってこと無いのだろう。俺はほんとにすごい人物を友達にしまったのかもしれない。

それはともかく。

俺は復縁の話が出た時から引つ掛かっていることがあった。他でもない、桃華のことだ。

兄さんは窓際から離れ再び椅子に座った。真っ直ぐ俺を見つめる。俺の心を全て解っているかのような表情で。

「自分の彼女のことを心配しているな。」

「……………」

またまた凶星だった。兄さんは読心術を心得ているのだろうか。

それとも俺が単純なのだろうか。

俺は兄さんの目を見るか否か迷っていた。兄さんの口調からはその心の内を覗くことができなかった。

そして僅かな沈黙の後。言葉を発したのは兄さんの方だった。

「さつき羨ましかつたと言っただろう。一人の人の為に動いたお前が。それなら何故俺がお前と彼女を引き離そうと考えると思っただ？」

「……………え〜と？」

「鈍い奴だな。一緒に居ればいいだろう。今まで通り。」

当然の様に言い、兄さんは淡く笑んだ。

「今すぐ実家に戻れとは言わない。今すぐ仕事を手伝えとも言わない。只、音咲家の人間として帰ってこいと言っている。大切な人と引き離す様な残酷なことはしない。お前は彼女といずれは結婚するつもりなんだろう？」

「……………。」

本日二回目の質問に素直に頷く。浅葱さんに答えた質問だったので、もう照れもしなかった。

兄さんは俺の答えを聞き、今までとは少し違う優しい微笑みを零した。俺が不思議に思って首を傾げると、兄さんは意外な言葉を晒した。

「俺にだって大切な人は居る。」

「……………！」

有り得ない！そういう表情をしていたのだろう。兄さんは眉を顰めて

「失礼な奴だな。」

と言った。

「お前の中の俺の人物像はどういうものなんだろうな……………。ともかく。そういうことだから。異存は無いな。」

「……………うん。」

気付けば俺は頷いていた。強引の様な兄さんの言葉が、今は嬉し

かった。

兄さんに愛する人が居るということが嬉しかったし、何より桃華を認めてくれたことは、この上無い喜びと安堵を感じた。

まだ半分夢の様な感じだけど。

「とということ。細かいことは後日決めよう。これは俺の携帯の番号。」

兄さんは時計に目を走らせ、スーツの胸ポケットから名刺を取り出して俺に渡した。それから俺の番号を教える様に求める。

俺の番号を携帯に入れながら兄さんは口を開く。

「俺もなかなか今時間が取れなくてな。今日はたまたま開いていた。今からまた行かなきゃならないけどな。また連絡する。彼女にも話しておいた方がいいだろう。」

「ありがとう。そうする。」

桃華はどういう反応をするのだろうか。俺はそんなことを考えながら頷いた。

と、兄さんの携帯が鳴った。兄さんは一瞬眉を顰めて電話に出た。何やら難しい顔（しかもフランス語だ）で話す兄さんはすっかり社長顔だった。

大変そうだな。俺は真っ先にそう思った。俺が出てすぐ父さんが死んで、ずっと独りで背負っていたのかと思うと胸が苦しくなった。ここまで俺のことを考えてくれた兄さんの為に、今度は俺が助けになりたい。そう思った。

「すまない。取り引き相手だ。ごちゃごちゃ細かくてな。」

面倒くさそうに言い、兄さんは携帯をしまった。

「さっきの場所まで送って行こう。」

「ありがとう。」

俺は笑み、立ち上がった。

呼吸

「じゃあ、また。連絡する。」

車から降りた俺に窓越しに兄さんは言った。俺は頷いて笑う。
「嬉しかったよ。ありがとう。」

俺の言葉にうつすらと笑みを零し、兄さんは車を発進させた。

「……………」

俺はまだ夢見心地のまま車が見えなくなるまで見送った。見えなくなつてようやく自分を現実に取り戻し、自分の車に向かう。

車に乗り込んだ時、携帯が鳴り出した。ポケットから取り出して相手を確認する。

「もしもし。」

『もしもしー。ゆうくん？大丈夫ー？』

「うん、大丈夫だよ。ちよつと遅くなつたね、ごめん。」

『大丈夫だよー。もう帰るー？』

「うん。帰るよ。」

答え、自然と笑みが零れた。

「ね、桃華。」

『うん？』

電話越しに桃華が首を傾げたのが分かった。

俺は目を閉じて言葉を綴った。

これを聞いたなら、君はどういう反応をするかな？喜んでくれるかな？

「いい報告があるんだ。」

第十二話 追憶

窓の向こうは雪が降っている。

「……………ふう。」

あたたかいコーヒーが胸を温める様にじんわり染み込み、つい吐息を漏らした。寒い日はあたたかいものに限る。なんて思いながら俺はコーヒーカップを両手で包んだ。

ゆったりとした音楽が流れていて店内は穏やかな雰囲気溢れている。隣のテーブルで交わされる静かな声は何故か心地良かった。

「失礼します。おかわりはいかがですか。」

ウェイターがコーヒーを持ってきてくれた。ありがとうございませ、と注いでもらう。もう三杯目になっていた。

（遅いなあ……………仕事入ったかな。）

携帯を開いて画面を見る。待ち合わせの時間は過ぎていないが、いつも待ち合わせ時間より十五分前には居るのに五分前になっても来ないという事はそうなのだろう。

（遅れるなら連絡してくるだろうしね。……………忙しいだろうし。）

携帯を閉じて外に目を向ける。ちらほらと舞う雪に嬉しそうに手を伸ばす子供が視界に入り、笑みが零れた。

と、店の自動ドアが開き、一人の人物が入ってきた。斬新でファッショナブルな服に身を飾るそのオーラは独特なものだった。

しかも、入ってきた瞬間から店内の女性の視線が釘付けになっている。そりゃそうだ。俺から見ても格好いいと思うのだから。

「よ、優詞。少し遅くなったね。」

そんなピンク色の視線に見向きもせずにつこり笑った真冬は軽く手を上げて向かい側に座った。ウェイターにコーヒーを注文して俺に目を向ける。

「久し振りだね。」

「そうだね。お互い色々パタパタしてるからね。……………結婚式以来

呼吸

じゃない？」

「そうかもね。」

そう言ってくすつと笑った真冬の左手の薬指には、シルバーリングが光っていた。

真冬の大学卒業から一年過ぎた今年の夏、真冬はモデルの瑠海七るみなさんとめでたく結婚した。と同時に瑠海七さんはモデルを辞め、真冬の店で働いている。お互い忙し過ぎるので『俺が仕事を辞めるかお前が辞めるか』という二択を出すと瑠海七さんがあっさり引退宣言をしたらしい。そしてずっと一緒に居られる様と同じ職場で働いている、という感じだ。

「……………」

真冬の指で小さく光るリングに目を向ける。

真冬の結婚式は、全て真冬がプロデュースした。式の段取りはもちろん、結婚指輪やタキシード、ウエディングドレスまで真冬がデザインし作成した。

こだわりだしたら止まらない奴だ。式は最初から最後まで細部に至るまで真冬らしいこだわりがちりばめられていた。素直にすごいと思えたし、本当に良い式だった。

真冬はコーヒーカップを手にとって口を開いた。

「桃華ちゃんは元気？」

「うん。元気にやってる。……………瑠海七さんにもらったブーケもまだ大切に持ってるよ。」

「そっか。プリザーブドフラワーで作ったから、半永久的に飾れるよ。……………でもあの時優詞頑張ったよね。」

「頑張ったよ。だって桃華小さいから抱き上げないと絶対取れないし。瑠海七さんが桃華に投げてくれたから助かったけど。」

「すごく嬉しそうだったじゃん、桃華ちゃん。」

微笑んで真冬は視線をコーヒーに向けた。まだ熱い筈なのにぐつと一気に飲み干す。

「何か俺に頼みたい事でもあるの？」

テーブルに頬杖をつき、微笑みをたたえた真冬の台詞に俺は『ははっ』と笑みを零した。

「うん、一応。なんで分かったの？顔に書いてある？」

「誰よりも優詞を知ってるのは俺ですからね。すぐ分かるよ。」

悪戯っぽい真冬の笑み。

昔から変わらない笑顔。

何度も何度も助けられた。

「ちょっと大きなお願いだから、忙しかったらいいよ。多分真冬も大変だろうし。忙しいでしょ。」

「何それ。俺にやってほしいの？やってほしくないの？」

「やってほしいけど……………」

「変なところで遠慮するな。」

テーブルの下で足を蹴られた。弁慶の泣き所に丁度あたり、目茶苦茶痛い。

少し顔を歪めた俺に涼しい顔を向け、強制的に吐けと命令する様な笑顔を向けた。

俺は姿勢を正し、痛いのを我慢して真冬の笑みを見つめ返した。

そして言っ。

今日真冬にお願いしたいと思ったことを。

「うん、あのね。…………俺と桃華の結婚指輪と、桃華の婚約指輪とウエディングドレスを作ってほしいんだ。真冬にデザインしてほしい。」

前からお願いしたいと思っていた事だった。絶対真冬にやってほしいと思っていた。

少し遅くなってしまった気もするけれど、ようやくその《時》が来たと思った。だから今真冬にこの話を持ち出した。

「……………」

真冬はじつと俺の目を見つめ、穴が開くんじゃないかと思う程強

い視線を向けている。

そして、急にふっと笑った。

「やっとその話に触れた。」

「……………」

おかしそくに笑う真冬の意味がよく分からず、俺は頭の上に疑問符を飛ばす。面白い事を言ったつもりは無いのだが。

真冬は背もたれにもたれ脚の上で手を組んだ。顔には含み笑い。

「いつその依頼が来るのかずっと待ってたんだから。遅いよ。」

「……………待ってたって。」

何故か恥ずかしくなつて顔を伏せる。そんな俺の言葉に真冬は同じ口調で続けた。

「だって、浅葱さんや流詞さんと《和解》してからもう二年半以上は経つよ。理解してもらえたんだからすぐ話出るかなと思いきや……………。まあいいけど。優詞が今が時だと思っただんなら。」

優しい声で言葉を並べ真冬はコーヒークップに口を付けた。顔を上げるとそこには穏やかな微笑。

「よかったね、優詞。」

ようやくここまで来たね、と真冬は笑顔で言う。

俺は首を竦めて笑った。

ずっと見守ってくれた真冬の口から出た言葉だったからこそ、あたたかくて素直に喜べる温もりがあった。

通りかかったウェイターにコーヒーを頼んで真冬は『それに』と続けた。

「もう優詞も卒業したしね。仕事もだいぶ慣れた？」

「うん。まあね。色々重いのはかりやらされてる気もするけど。」

「あの人ならやるね。でもいいんじゃない？仕事も落ち着いたなら結婚したらあの豪邸もらえるんでしょ？あつちで式挙げたりとか。」

「それもいいかもしれない。」

「どうせなら結婚式もプロデュースしようか？ていうかやるよ。」

「え？忙しくない？」

「忙しいけど、優先順位の問題だよ。」
「きつぱり言い切る真冬。」

「親友の結婚式だもんな。全力全霊で最高の式にするよ。」

「……………ありがとう。」

俺は只、心からの礼を言う事しかできなかつた。

本当に。

本当にありがとう。

「さて、大まかな事は決まったし。仕事に戻らないと。」

真冬はコーヒーの残りを飲み干し、口調を変えて言った。俺も時間を確認する。

「……………」

結構やばい。また兄さんに叱られるかもしれない。そろそろ呼び出しと怒りの電話が来そうだ。

「細かいことは電話かメールで調整していこうか。お互い多忙の身ですから?」

悪戯っぽく言い立ち上がる真冬。俺も同じ様にする。奢るよ、と先に歩いてレジに向かった。

「あ、そうだ真冬。」

俺は真冬を振り返り、声をかけた。真冬はコートを羽織って俺に目を向ける。

「桃華、『CO-ZAH』で働かせてもらえないかな。真冬の店で働きたいって最近言ってたんだ。」

「へえ。すごい進歩じゃん。」

「そう言い、真冬は笑った。」

「もちろん、大歓迎だよ。」

「そう言い終わるや否や、真冬は笑顔のまま俺の手から、すつと伝票を抜き取った。そして何も無かつたかの様にレジに出す。俺はその早業に啞然するしか無かつた。」

「いくら音咲グループ第二席と言えど、俺を奢ろつうなんざ百年早い。」

さつさとカードで支払いを済ませ当然の様に言う真冬。俺は只苦
笑してそれに答えた。

ありがとう、そう言って。

「どういたしまして。」

その真冬の言葉を最後にその日俺達は別れた。

最終話 君が居れば

「ぬぁ……………やっぱり後回しにするんじゃないかった。失敗……………」

「

手にしている書類から目を外し、机の上に山積みされた茶封筒やら書類やらに目を向ける。自業自得とは言え嘆息の溜め息は禁じ得なかった。

今週いっぱい出せと社長（兄さん）直々の命令が来ているので早めに終わらせなければならぬ。兄さんの鬼の様な顔が頭をよぎり、ブンブンと頭を振ってそれを追い出す。

「と言っても、なんだかやる気出ないなあ……………」

やる気の問題では済まされないのだが。

俺は腕を組む。

（さあ、このまま放置して兄さんに叱られるのと、無理矢理でも終わらせるの、どっちがいい？）

自問自答し、しかし答えは既に出ていた。

（やるか……………。というか、やらなくちゃいけないか。）

やる気が出なくてもやる方が、兄さんに睨まれるより良かったです。とりあえず終わらせようと椅子に座る。すぐ近くにあった書類を引き寄せ目を通す。

と、部屋のドアがノックされた。顔を上げると少し開かれたドアの向こうから桃華がひょっこり顔を出した。俺は笑って手招きをする。

「おかえり、桃華。」

「ただいまー。今大丈夫なの？ゆうくん。」

「うん。仕事山積みだけど。」

笑って言うと桃華も笑った。軽く跳ねる様に歩きながら机に近付いてくる。

「どうだった？今日の仕事は。」

呼吸

俺の膝にぴよんと座って来た桃華に問う。桃華は『うんっ』とにっこり笑った。

「瑠海七さんがねー、とつても可愛かったー。」

「そうなんだ。」

俺は笑ってそれに答えた。

この問いに対する桃華の返事はいつもこの台詞から始まる。『C O-ZAH』で働き始めて約三か月になるが、そこで初めて瑠海七さんに会った桃華は瑠海七さんの圧倒的に整った容姿に衝撃を受けた様で、仕事の報告はまずそれから始まるのだ。

それに、桃華は今まで『世界』というのを知らなかった。だから、あらゆるものにカルチャーショックを受ける。瑠海七さんも、その一例だ。

桃華の『世界』は特に、本当に狭かったから。

だから、それがこうして広がっているというのはとても嬉しいことだった。桃華の『世界』は確実に開かれていっている。

もう、あの時の桃華に戻っている。元気だった、あの頃に。

「真冬くんが、ゆうくんによろしくってー。今日は真冬くんが家まで送ってくれたの。」

「そうなんだ。後でお礼言っておかなくちゃ。」

「うんっ。」

桃華は膝からぴよんと降り、ソファに向かった。テーブルの上のティーポットを持ち上げるものが入っていないならしく、首を傾げてポットを持ったままトトト……と走って行った。新しく入れてもらうのだろうか。

「……………」

俺は桃華の後ろ姿を見送り、ふっと笑みを零した。

そして桃華が見えなくなるのを確認して、机の引き出しの鍵を開けゆっくり引いた。その奥にしまっている小さな箱を手取る。

ゆっくりケースを開ける。

「……………ふう。」

小さなリング。光をいっぱい集めて優しく輝いている。

「……………真冬らしいよなあ。」

上品で可愛い、桃華にぴったりのデザインのその婚約指輪は、先日真冬が持つて来たばかりだ。ケースまでデザインしてくれたらしい。シンプルで、しかし繊細なこだわりが見え隠れするリングに仕上がっていた。

「……………」

自然と顔がほころぶ。誰かが入って来たらさぞ怪しいと思うだろう。

そろそろ、いいだろう。

先延ばしにする理由はない。

「またまたただいまー。西郷さんが新しいティー入れてくれたよー。」

元気な声で歌う様に言いながら桃華が入って来た。

「温かいティー飲みますか？ゆうくん。」

「ありがとう。」

「入れるねー。」

桃華は小走りで俺の座っているところまで来ると、書類に埋もれかけていたティーカップを探し出した。

「このカップいつの？ゆうくん。」

「一応今日の。書類引っ掻き回したらこんなことになった。」

肩を竦めて答えると、ゆうくんも忙しいですねー、と桃華は楽しそうに笑った。

「……………」

カップに注がれたティーから上るあたたかい湯気を見ながら、咄嗟に机の下に潜ませた婚約指輪の入ったケースを弄ぶ。

一番いいタイミングというのはよく分からないけれど、
今でも、いいかな。

ロマンチックに、とはいかないけど。
それが俺と桃華に合っている気もするし。

「桃華。」

ティーを注ぎ終えた桃華を呼び、静かに立ち上がる。桃華はくり
つとした大きな目を向けてきた。

光に濡れた、その瞳を。

光を生み出す、その瞳を。

俺は桃華としっかりと向き合い、背中に隠していたケースをそつと
前に回した。両手を添えて桃華に差し出す。

何かを躊躇っている様な表情の桃華に微笑みかけ、俺はそのケー
スの上半分に右手の指をかけた。ゆっくりと開ける。

「……………わぁ。」

その中の指輪を見た瞬間、桃華は感嘆の声を上げた。嬉しさに驚
きを乗せた表情で俺を見上げる。

俺は照れのような感情を抱いたまま口を開いた。
願いを込めて。

「これからもずっと一緒に居ようね、桃華。」

「……………。」

桃華はあまりの驚きに目を丸くしたまま言葉を失っていた。熱も
無いのに頬が真っ赤だ。こんなに驚いている桃華は初めて見たかも
しれない。

もしかしたら、桃華はこういうのを全く予想していなかったのか
もしれない。

一緒に住み始めたのだから、桃華と一対一で決めたわけじゃない
し、付き合ったのだから『いつの間にか』だ。前から仲は良かった
ものの、成り行きの恋人になっていた。きちんと けじめ とい
うのを付けたことは無かったと思う。

もちろん、プロポーズは初めてだ。

俺は固まってしまった桃華の左手をそっと取った。指輪をケースから取り出し、ゆっくり指に入れていく。細い桃華の指に指輪は綺麗に収まった。

「……………わぁ……………」

手の甲をかざして眩しそうに指輪を見つめる桃華。きらきら輝く目を見て俺は嬉しさに笑みを漏らした。

桃華は指輪から目を逸らし、俺に向けた。照れた様な顔は頬が赤く染まっていた。

「ねえ、ゆうくん。桃華、ゆうくんのお嫁さん？」

「え？うん。そうだね。」

「ずっと一緒？ずっと？」

「ずっと一緒。ずっと。」

「あはは。」

桃華は笑い、踊る様にくるくる回った。指輪をした左手を高く掲げ、見つめながら。

そして不意に回るのを止めると、くるりと俺に向き直った。そのまま走り寄ってくる。

俺の腰に腕を回し、ぎゅっと抱き付く桃華。俺も桃華の肩に腕を回した。

「ゆうくん、大好きっ。」

満面の笑顔で。

全てを明るく照らす様な笑い顔で。

「俺もだよ。」

返すと、桃華はぱっと顔を上げた。何かを思いついた時の子供の様な表情。

そして、ニカーッと笑った。

「ゆうくん、みんなに見せてくるねーっ。」

「え？ええ！？」

言うなり桃華は扉に向かってダッシュした。俺の声は閉じられた扉の音にかき消され、桃華は電光石火の早業で（普段はとろいのに

……) 部屋から居なくなっていた。

「……………」
広い部屋にぼつんと残される俺。喜んでくれたのは嬉しかったけど……こんなに大きなアクションがあるとは思わなかった。

「……………はは。」
でも、ようやく けじめ を付けられた気がする。俺と桃華の関係を揺るがないものにできた気がする。

ここまで、本当に長かったけど。
だけど、確実に光は増している。

「いけない。仕事終わらせなきゃ。」
自分を現実に取り戻し、机に向かう。これを片付ければ、少し余裕ができる。そしてら真冬と式の詳しい計画を話し合おう。桃華も一緒に計画を練ろう。

式はあくまでも通過点でしか無いかもしれないけど、これからも桃華と一緒に居たいから。

桃華と幸せになる為に。

今まで以上に幸せになれる様に。

桃華を、幸せにできる様に。

そう。

君が笑っていてくれたら、それでいい。

最終話 君が居れば（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました。誤字脱字に気を付けていますが、もしかしたら、もしかしたらあるかもしれない（汗）もし見つけても是非目をつぶって下さい。出来れば感想をもらえると嬉しいです。

本当に本当にありがとうございました！

ゆずのもと

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、

個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3953b/>

呼吸

2008年11月7日07時57分発行